田辺聖子の古典エッセイ：『萬葉百首散歩』を中心に

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-02-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中, 周子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4444

大阪樟蔭女子大学研究紀要第一〇巻（二〇二〇）

研究論文

田辺聖子の古典エッセイ
―『萬葉百首散歩』を中心に―

学芸学部　国文学科　中　周子

要旨：作家・田辺聖子は二〇〇八年に文化勲章を受章したが、その受章理由の一つに古典文学の継承と普及に果たした功績が大きいことが挙げられている。このように、田辺聖子の古典文学への造詣の深さは広く認められているにも関わらず、田辺文学の創作基盤と古典文学との関わりについての考察はほとんど行われていない。本稿は、田辺聖子の古典エッセイの中から、『萬葉百首散歩』を中心に取り上げて、田辺聖子の古典エッセイの構成と方法を探り、その中に、田辺文学の創作姿勢と方法に通じるものを見出せることを論じた。すなわち、『萬葉百首散歩』は、『万葉集』の歌序に従ったり、歌人によってまとめたり、といった通常の和歌評釈の体裁をとらず、古典和歌を用いて田辺文学に通底する人間観や人生観を語るエッセイなのである。『萬葉百首散歩』の考察を通して、古典エッセイもまた、小説と並ぶ田辺文学の重要な一環であることを論じた。

キーワード：田辺聖子、古典エッセイ、『万葉集』、『萬葉百首散歩』

一、はじめに

田辺聖子は、多種多彩な作品を生み出した作家であるが、軽妙な大阪弁によるエッセイや現代の恋愛小説が、その代表作であると捉えられることが多い。もちろん、『新源氏物語』をはじめとする日本の古典文学に取材した作品や『文車日記―私の古典散歩―』のような古典を紹介したエッセイもよく知られているのであるが、それらは、田辺聖子の古典に対する造詣の深さを示す作品と捉えられるのみで、古典エッセイと田辺文学の創作基盤との深い関係性を見出すという観点からは、考察されてはこなかった。

例えば、古典文学（『古事記』）に取材した最初期の作品として『隼別王子の叛乱』（一九六一年六月「のおと」）があるのだが、田辺聖子は、この作品と同様の題材を「女鳥の姫」（学習研究社『高三コース』）や「風わたる高楼」（一九七一年三月「小説サンデー毎日」）として発表し、さらに古代の文化と生活の精査に基づく加筆と改稿を重ねて、「歴史と人物」（中央公論社）に連載（一九七五年七月号～一九七六年九月号）している。一九七七年一月には、中央公論社から単行本・『隼別王子の叛乱』を発行している。この作品の場合を見ても、田辺文学における古典接取は、一作品に限る発想や方法といった類ではなく、継続的かつ発展的に深められてゆくという有り様が窺えよう。

田辺聖子の作品の中で、古典関連の主な著作（単行本）を概観しておこう。

『文車日記―私の古典散歩―』（一九七四年、新潮社）
『小町盛衰抄―歴史散歩記―』（一九七五年、文藝春秋社）
『隼別王子の叛乱』（一九七七年、中央公論社）
『舞え舞え蝸牛―新落窪物語―』（一九七七年、文藝春秋社）
『新源氏物語』（一九七九年、新潮社）
『おちくぼ姫―落窪物語―』（同年、平凡社）
『私本・源氏物語』（一九八〇年、実業之日本社）

『竹取物語・伊勢物語』（同年、学習研究社）
『源氏紙風船』（一九八一年、新潮社）
『春のめざめは紫の巻―新私本源氏―』（一九八三年、実業之日本社）
『むかし・あけぼの―小説枕草子―』（同年、角川出版）
『田辺聖子の古事記』（一九八六年、集英社）
『田辺聖子の小倉百人一首』（同年、角川書店）
『恋のからたち垣の巻―異本源氏物語―』（一九八七年、実業之日本社）
『田辺聖子と読む蜻蛉日記』（一九八八年、創元社）
『古典の森へ―田辺聖子の誘う―』（同年、集英社）
『『源氏物語』の男たち―ミスター・ゲンジの生活と意見―』（一九九〇年、岩波書店）
『新源氏物語・霧深き宇治の恋の物語』（同年、新潮社）
『今昔物語絵双紙』（同年、角川書店）
『東海道中膝栗毛』（同年、講談社）
『『源氏物語』男の世界』（一九九一年、岩波書店）
『源氏たまゆら』（同年、講談社）
『花はらはら人ちりぢり―私の古典摘み草―』（一九九三年、角川書店）
『うたかた絵双紙―古典まんだら―』（同年、文化出版局）
『とりかへばや物語』（同年、講談社）
『源氏・拾花春秋』（一九九八年、文英堂）
『古典の文箱』（一九九九年、世界文化社）
『田辺聖子の源氏がたり』（二〇〇〇年、新潮社）
『小倉百人一首〈二一世紀によむ日本の古典〉』（二〇〇一年、ポプラ社）
『武玉川とくとく清水―古川柳の世界―』（二〇〇一年、岩波書店）

田辺聖子が、芥川賞の受賞（一九六四年一月）以後、古典文学に取材した作品や古典紹介を間断なく執筆し続けていることが分かるのである。

本稿は、田辺聖子の数多の業績の中で、とかく看過されがちな古典紹介に焦点をあてて考察する。具体的には『万葉集』について書かれたエッセイ『萬葉百首散歩』を中心に取り上げて考察する。そこに田辺文学に通底する視座を端的に看取し得ると考えるからである。

二、田辺聖子と短歌

『万葉集』との関わりを探るにあたって、まず、田辺聖子と短歌との関わりについて述べておきたい。

田辺聖子は、十二歳頃から『少女の友』を愛読していたという[1]。一九〇八年に創刊された実業之日本社発行の少女向け雑誌である。一九三〇年代になると、後にノーベル賞作家となる川端康成や吉屋信子の連載小説が好評を博した。雑誌の人気は、中原淳一の挿絵によるところも大きかったが、彼は一九四〇年に執筆を禁じられる。その理由を、田辺聖子は次のように述べている。

少女小説の挿絵は、当時、少女に人気のあった中原淳一がもっぱら担当していた。大きな眼と、長い手足をもった甘い美しい少女の絵だった。ところが、それらの絵は、戦時下の軍国日本にふさわしくない、頽廃的で不健康なものだというので、軍部の圧迫で消えることになった。昭和十五年七月号の『少女の友』から中原淳一の絵は、表紙にも挿絵にも見られなくなった[2]。

よほどの衝撃だったのであろう、『少女の友』の誌面から中原の絵が消えた号数を、鮮明に記憶しているのである。その『少女の友』に、田辺聖子の短歌が載っている。田辺聖子は女学校時代から短歌を創作し、文学雑誌に投稿していた。樟蔭女子専門学校時代に進学後も「短歌クラブ」に所属していたことから、少女時代から短歌に親しんでいたことが分かる。

十代の頃の田辺聖子の短歌は、女学校三年の時に手作りした雑誌、表紙には中原淳一ばりの絵を描いた『少女草』（おとめぐさ）という回覧雑誌[3]によって知ることが出来る。雑誌の内容は、短歌、詩、エッセイ、小説をはじめ古典鑑賞もあり、「聖書の教訓」や「修養の言葉」等もある。クラスメイトからの投稿も募って載せているが、ほとんどが田辺聖子の作である。『少女草』に載せた短歌の中から一首を『少女の友』に投稿し、見事に一席に選ばれるのである。

公の雑誌に活字化された田辺作品の最初は「和歌／短歌」であったことは興味深い。その間の事情は、後年の自伝小説『欲しがりません勝つまでは』（一九七七年、ポプラ社）に詳しい。

『少女草』の第二号[4]はすばらしい表紙になった。（中略）

短歌はやっぱり、二十首くらい、ある。

「写生せし水仙の花枯れにけり　捨てかねつつも土に埋めぬ

月あかき崖をまはれば海見えて沈丁花のはなほのかに匂ひつ

『サヨナラ』と船の上よりなげかけしわかれのことば永遠にわすれず」

などであるが、「月あかき」の歌は私は、たいそう気に入ったので、『少女の友』の読者文芸欄へ投稿した。（中略）

『少女の友』の発売日をまちかねて本屋へゆき、家へ持って帰って見ていたら、私の歌が短歌の投稿欄の一位になっているではないか。「月あかき…」の歌である。（中略）

「のってる、ウチの歌が、のってる！」

と私は本のページをあけて母にみせ、母の顔色を見ていた。母は歌をよんで顔色も変えず、

「こんなんがええのかいな」

という。たよりない。（中略）

私は自分の部屋へもちこんで、とっくり、じっくり、百万べんくらいながめて楽しんだ。[5]

この時の『少女の友』の選評にはこう記されている。

田辺聖子さんの歌は、歌われている情景も、作者の心も美しく、沈丁花の花のごとく匂っている。それは対象と作者の融合した賜物である。[6]

しかし、注目すべきは、この短歌の創作事情である。

私は、『月あかき崖』をまわることなどない、都会の下町っ子であるが、何かの雑誌の口絵でみた景色がステキであったので、それを歌にしたのである。[7]

短歌を実詠としてではなく、虚構として作歌していたというのである。十代にして、すでに短歌を意図的に創作していたことは興味深い。

このエピソードに交じって「愛国百人一首」のことが書かれている。

愛国百人一首は、ことしのお正月にはじめて売り出された。戦時下の日本で、今までの小倉百人一首のような、恋だの愛だのをのどかに詠んだものはふさわしくないというのだ。

「今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯といでたつわれは」

とか、

「大君のみことかしこみ磯に触り海原わたる父母ををきて」

というような、いさましい『万葉集』の防人たちの歌、また幕末の勤王の志士といった人々の歌なんかが、採り上げられていた。[8]

女学校の頃にすでに『万葉集』の和歌を読んでいたこと、そして、万葉歌と当時の世相との関係が窺える一節である。今回取り上げる『萬葉百首散歩』においても、田辺聖子は、たびたび昭和初期における『万葉集』享受の有り様について触れているが、この点については後述したい。

因に、田辺聖子の最初のまとまった古典エッセイとしてロングセラーとなっている『文車日記』[9]の冒頭の章には「額田女王の恋」が置かれている。同書には、他にも「わが愛の磐之姫」、「老いゆく君」と三つの章で、『万葉集』の和歌を取り上げている。また、「萬葉百首散歩」が、『Dame』の創刊号[10]から連載されることになり、連載終了後も引き続き「新・萬葉散歩」が連載されることになるが、同時期に読売新聞に『田辺聖子の百人一首』[11]の連載が始まっている。

田辺聖子は少女時代から短歌を愛読・実作し、作家となって以降も古典和歌の評釈・鑑賞を意欲的に執筆していたのである。

三、田辺聖子の『萬葉百首散歩』

田辺聖子の『万葉集』に関するまとまったエッセイとしては、『萬葉百首散歩』と『新・萬葉散歩』とがある。いずれも、主婦之友社が発行する雑誌『Dame』に連載されたエッセイである。掲載誌の『Dame』は、一九八四年七月に月刊誌として創刊され、一九八七年八月、四巻八号（通巻三八号）をもって終刊した。

『萬葉百首散歩』が掲載されたのは、『Dame』創刊号から第十号（一九八五年四月）までの毎号で、全十回、毎回各十首を取り上げているので、題名にあるように合計百首となる。ただし、この百首は田辺聖子の選歌ではない。『Dame』創刊と期を同じくして、一九二七年（昭和二年）に製作した「萬葉百首繪かるた」が発見されて、和紙木版手刷による覆刻が企画され、田辺聖子による万葉エッセイの連載が企画されたのである。

「萬葉百首繪かるた」となった『万葉集』の百首は、『主婦之友』の読者の投票によって選ばれた歌である。かるたの絵は、当時活躍中の画家、平福百穂、野田

九通、小林古径、安田靫彦、前田青邨が描き、和歌は尾上柴舟が染筆している。かるたの製作と同時に、太田水穂による簡潔な百首の評釈をまとめた『萬葉百首選評釈』[12]も出版されている。田辺聖子は、「萬葉百首繪かるた」について次のように述べている。

なんという美しい芸術品だろう。

こういう企画を実現させた、当時の主婦之友社の充実ぶりもさりながら、昭和初期という時代の、ただならぬ「万葉」への傾倒と心酔を思わずにはいられない。あの時代の物狂おしいほどの情熱が凝って、こんな一顆の珠のごとき絵かるたを作らせたといえるであろう。その頃の日本人が「万葉集」に捧げた讃仰は、ほとんど祈りといえるほどものだった。[13]

このかるたが製作された一九二七年は、第一次世界大戦の勝戦によって手に入れた中国での権益が、抗日運動によって揺らぎはじめ、排日の激化によって在外日本人への暴挙が続く中で、山東省への出兵が断行された年である。その後、日中の対立抗争は激化の一途をたどり日中戦争へと突入することになるのだが、国内では、昭和天皇の即位礼が挙行され、ことに愛国ムードが高まりを見せていた時代であったといえよう。『萬葉百首散歩』には、そのような時代への言及も少なくない。そして、田辺聖子自身が少女時代に抱いた『万葉集』に対する回想も合わせ述べられている。

私の学生時代はおもに昭和十年代の後半だったから、教わる古典、世間で目に触れる古典、ほとんど「万葉」一色であった。時代は軍靴のひびきと硝煙の臭いに掩われようとしていた。一部の学者と軍人は国粋主義や日本精神と「万葉集」を結びつけようとした。実際、私たち学生が教わるのは、勇ましい戦意昂揚歌や、天皇への忠誠の歌ばかりであった。[14]

第二次世界大戦の開戦以降、日本政府と軍部が『万葉集』を国威発揚に利用したことは有名である。海軍の連合艦隊司令長官の山本五十六も『万葉集』を戦場に携えたという。[15]

ところが、そのような時代の「万葉集」理解に収まりきらない歌が、「萬葉百首選」には、選ばれている。そのことに田辺聖子は注目している。

軍国主義の下では恋の歓びを唱うこともはばかられるが、「万葉集」にはそれら、人々が歌うべかりし本音の歌が、ひそかな代弁者としてある。

いさましい歌を言挙げしつつ、一方で本音の歌を当時の人々は支持していたのではなかろうか。この「萬葉百首選」には「万葉集」と当時の国粋主義との蜜月を示す作品も採られているけれども、恋歌も叙景歌もひとしく拾い上げられて、当時の人々の目くばりがゆきとどいていることを思わせる。[16]

この一文は、そのまま、田辺聖子自身の『万葉集』享受の有り様を語っているようである。『萬葉百首散歩』は、昭和初期の『万葉集』享受に対する、「再読」の提唱なのである。

では、戦争の記憶と強く結びついた万葉集歌を、田辺聖子はどのように読み直しているのであろうか。例えば、天皇を神と仰ぐ万葉歌[17]がある。

大君は神にしませば天雲のいかづちの上にいほらせるかも

柿本人麿（巻三・二三五）

この一首に対して、田辺聖子は「『大君は神にしませば』は昭和初期の国粋主義者たちをさらに煽動する皇室讃歌として利用された。それゆえ、『万葉集』にあるこのたぐいの歌は、戦後埋没されてしまった」という昭和期の読みを示す一方で、「このような歌は、当時（万葉時代―天武・持統・文武朝―）の宮廷にあっては儀式的な讃歌であることを忘れてはならない」と、詠作当時の精神への関心を喚起している。

また、「古代日本はかつてない統一と結束をみた」、「安定と繁栄がもたらされ、国のエネルギーが燃え上がった。そのとき人々は天皇に『現人神』のイメージをみる」、「民族の期待に満ちた視線は天皇にそそがれる」それは、「素朴な、敬虔な信仰」であると読み解いている。

そのような万葉時代の理解に基づくならば、「神にしませば」と歌われる「大君」は、「昭和初期の軍国時代の、硬直した『現人神』思想、暴圧、禁忌の象徴としての『神聖冒すべからざる』現人神としてではなかったように私には思われる」という見方を提示するのである。

また、次の歌も「戦中派世代にはなつかしい歌」で「愛国百人一首」にも選ばれて、「叩き込まれ」た歌[18]だといわれる。

御民われ生けるしるしあり天地の栄ゆる時にあへらく思へば

海犬養宿禰岡麿（巻六・九九六）

内容は「天地の栄えているこの聖代に生まれ合わせた幸せ」を歌っているので

あり、歌自体は「のびのびと」おおらかな喜びを歌い上げたものである。しかし、田辺聖子はこの歌が、「恣意的な彩りをほどこして、時代精神のより所に」されたという。本来の意味を離れた読みであったと指弾する。

この歌を私たちが朗誦させられたのは学徒動員のころであり、もんぺをはいて胸に住所、姓名と血液型を書いた白いキレを縫いつけていた時代であった。万民の苦難をよそに、この万葉歌はひとり燦然と虚空に輝いていた。食糧難と空襲におびやかされつつ、『生ける験あり』とはどういうことか、考えるすべももたなかった

というのである。

そして、現代の人々が「それぞれの立場から思い思いに古典を愛し始めた風潮」こそが、古典享受のあらまほしい楽しみ方だというのである。

もう一例、戦場へ行く兵士を見送る人々の、「生きて帰ってほしいと、あからさまにいえなかった」また、「勇ましく送らねばならなかった」気持ちを代弁するような歌[19]がある。

千萬の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべき男とぞ思ふ

高橋虫麿（巻六・九七二）

この歌を贈られたのは藤原宇合で、遣唐使となったり、蝦夷の討伐や、西海道節度使という軍政と防備の任をまかされており、歌に「千万人の軍勢をも討ち負かす益荒男」と讃えられるほど勇ましい男性である。ところが、この虫麿の歌を贈られた壮行会の折に、宇合自身が作った漢詩[20]がある。そこには、勇敢と讃えられている宇合の意外な一面が現れているのであるが、その漢詩を田辺聖子は引用している。

往歳東山役。今年西海行。行人一生裏。幾度倦辺兵。

「往く歳は東山の役、今年は西海の行、行人一生の裏、幾度か辺兵に倦まん」という漢詩からは、「一生をこんな辺境の長官で過ごしてしまうのかなあという長大息が聞こえる」と記している。このような本音をもらした漢詩を併せ記し、「千萬の軍」という万葉歌を「建前の歌」として対比するのである。絶妙な目配りによる引用といえよう。

さらに、「萬葉百首選」には、時代風潮に無縁の歌が、時代に左右されない読者の鑑識眼によって選ばれた歌が入っていることにも目敏く注意を向けている。

例えば、「人言は夏野の草の繁くとも妹と我とし携はり寝ば[21]」と、恋を「直截的」に歌い上げる作者未詳歌については「この歌を百首の中に入れた昭和初期の民衆の感覚も、すこやかである」と評している。

また、志貴皇子の「石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも[22]」に対しては、「『万葉』が昭和の始めに愛された理由の一つに朗誦に堪える骨太な、しかも流麗なリズム、というのがある。当時の人々は、朗々と『万葉』を詠ずるのを好んだ」と評している。

さらに「風に散る花橘を袖に受けて君がみためと思ひつるかも[23]」という作者未詳歌については「昭和初期の民衆が著名歌人の作品より読み人知らずの歌に多く共感を寄せているその心情が面白い」と評している。どのような時代にあっても、自由に文学を読む人々が存したことを見逃してはいないのである。

このように、昭和初期の読みを辿りながらも、万葉の時代と作者への豊富な理解に基づき、心楽しい生き生きとした読みを拓いてゆく、その根底には、文学を読み楽しむ人々への信頼と共感がある。田辺聖子の古典エッセイの真髄といえよう。

四、古典紹介の方法

さらに、選歌された百首には、どのような解説が施されているかを見てゆこう。田辺聖子の豊富な古典知識が随所に見出せることは、もちろんであるが、ここでは、歌ことばが描く自然の風物や作者の真情が、美しい現代語によって再現されている点に注目したい。

例えば、山辺赤人の歌「ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く[24]」については、次のように記されている。

「夜の闇も、夜の静けさも、夜気の寒さも、赤人を得て、清らかなものにきわまった。汚辱でまがまがしく不吉なものを秘めた闇が、ここでは清らかなものに化した。川の流れの透徹な清さと競うように、闇は清浄なものにたかめられた。その天地のあわいを、黄金のような千鳥の鳴き声が縫うのである。」

「自然の美を歌う声は、はや赤人の地声である。（中略）自然の色彩をそのままにとどめる。それをうたう地声は澄んで透明である。」

赤人の和歌の言葉の説明ではなく、彼の見聞きした美しい自然を描写するのである。そして、その自然の美しさを歌い上げる赤人の声音を描くのである。古代、和歌は歌い上げられることが常であったからである。「昔からたくさんの人々に愛された名歌である」との結びの一文が説得力をもって読者に迫ってくる。

また、人麿の歌「巻向の檜原もいまだ雲居ねば小松が末ゆ沫雪ながる」[25]については、こう記している。

目を転じて山を見上げれば、泡のようなこまかい雪がまなかいをかすめるではないか。

〈巻向山の檜の林にはまだ雲もかからぬのに、小松の枝の先から、はや沫雪が流れてくる〉

この情景は静止した絵ではない。墨絵のような山肌が、くっきり見えるのに、松の小末には流れる雲が渦巻くのである。

これらは、単なる和歌の現代語訳でも、評釈でもない。和歌に詠じられている光景を想像し、追体験して美しく描写したものである。

また、和歌を詠じる作者の姿、口吻や眼差しまでもが彷彿とする記述も多い。例えば、「春過ぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたり天の香具山」[26]という歌を取り上げて、持統天皇の生涯をたどりつつ、女帝が藤原の宮に遷都した時、五十歳となり譲位を目前に控えた心情に触れている。

女帝は過ぎてきた波乱の人生を思う。いまその艱苦はすべてみのりをもたらし、女帝はかつてない大きいやすらぎの中にいる。男と同等に戦い、勝ち抜いて来た女帝の、目と心を喜ばせるものは、四季の自然のたぐいない美しさである。

女帝は、おのが領有く都を見やりつつ、頭をあげる。

北に耳成山。西には畝傍山。東に香具山。

まさに、持統天皇が歌を詠じる瞬間に、読者も立ち会っているような臨場感を抱かせる描写である。

次の歌「神奈備の石瀬の杜の呼子鳥いたくな鳴きそ我が恋まさる」[27]についても、作者である鏡王女の心情を深く汲みとっている。

森は鬱蒼と茂りに茂り、奥は仄暗く静もりかえっている。そのとき人の魂を誘うように小鳥の声がこだまする。王女は秘めた恋を誰にもうちあけていないのかもしれない。ただ神秘な鳥の声に耳をかたむけ、人知れぬ恋の苦しさの傷をみずから庇っている……。

作者の心と歌に詠まれた光景が、読み手の脳裏に美しい像を結び、耳には深閑とした森の奥から響いてくる呼子鳥の声が聞こえてくるようである。

このように、三一文字の和歌に凝縮されている情景や心情を、田辺聖子は自らの筆によって一幅の絵のように美しく描き直すという手法をとっている。現代語訳の難しい和歌を、見事にリライトしているのである。

五、『萬葉百首散歩』の構成

最後に、『萬葉百首散歩』の全十回が、どのように構成されているかを一覧しておこう。以下、連載の回数。その回に取り上げられている和歌の初句、『万葉集』の巻数、・作者名の順に記す。

〈第一回〉

「石走る」（巻八・志貴皇子）、「あかねさす」（巻一・額田王）、「あぶら火の」（巻一八・家持）、「五月山」（巻一〇・未詳）、「人言は」（巻一〇・未詳）、「東の」（巻一・人麿）、「我が妻は」（巻二〇・身麿）、「にほ鳥の」（巻一四・未詳）、「多摩川に」（巻一四・未詳）、「ありつつも」（巻二・磐姫皇后）

〈第二回〉

「春過ぎて」（巻一・持統天皇）、「時鳥」（巻一〇・未詳）、「我が宿に」（巻八・書持）、「事しげみ」（巻八・四縄）、「風に散る」（巻一〇・未詳）、「六月の」（巻一〇・未詳）、「我が宿の」（巻一〇・未詳）、「かき霧らし」（巻九・未詳）、「ひぐらしは」（巻一〇・未詳）、「夏の夜の」（巻八・坂上郎女）

〈第三回〉

「河上の」（巻一・吹芡刀自）、「大君は」（巻三・人麿）、「ひさかたの」（巻三・人麿）「あをによし」（巻三・小野老）、「御民われ」（巻六・岡麿）、「今日よりは」（巻二〇・与曽布）、「防人に」（巻一四・未詳）、「神奈備の」（巻八・鏡王女）、「熟田津に」（巻一・額田王）、「わたつみの」（巻一・天智天皇）

〈第四回〉

「今朝の朝明」（巻八・穂積皇子）、「秋の田の」（巻一・但馬皇女）、「二人ゆけ

ど」（巻四・大伯皇女）、「秋の田の」（巻二・磐姫皇后）、「君待つと」（巻四・額田王）、「秋萩に」（巻八・山口女王）、「夕月夜」（巻八・湯原王）、「ぬば玉の」（巻六・坂上郎女）、「春日野に」（巻八・八束）、「秋の野に」（巻八・憶良）

〈第五回〉

「わが宿の」（巻一九・家持）、「夕されば」（巻八・舒明天皇）、「天の川」（巻一〇・人麿）、「誰そ彼と」（巻一〇・人麿）、「笹の葉は」（巻二・人麿）、「三熊野の」（巻四・人麿）、「君に恋ひ」（巻一〇・未詳）、「こほろぎの」（巻一〇・未詳）、「大君の」（巻八・家持）、「秋づけば」（巻八・日置長枝娘子）

〈第六回〉

「馬買はば」（巻一三・未詳）、「都なる」（巻三・旅人）、「妹が見し」（巻五・憶良）、「幸福の」（巻三・未詳）、「我が背子と」（巻八・光明皇后）、「み吉野の」（巻一・文武天皇）、「久かたの」（巻四・坂上郎女）、「家に来て」（巻二・人麿）、「憶良らは」（巻三・憶良）、「銀も」（巻五・憶良）

〈第七回〉

「新しき」（巻一九・道祖王）、「すめろきの」（巻一八・家持）、「もののふの」（巻三・金村）、「千萬の」（巻六・虫麿）、「冨士の嶺に」（巻三・虫麿）、「昼見れど」（巻三・益人）、「旅人の」（巻九・遣唐使随員母）、「唐国に」（巻一九・鷹主）、「をのこやも」（巻六・憶良）、「蘆辺ゆく」（巻一・志貴皇子）、

〈第八回〉

「巻向の」（巻一〇・人麿）、「あしひきの（山道も）」（巻一〇・人麿）、「あしきひの（山川の）」（巻七・人麿）、「ぬばたまの」（巻六・赤人）、「若の浦に」（巻六・赤人）、「川風の」（巻三・山前王）、「我が背子に」（巻八・赤人）、「我が園に」（巻五・旅人）、「梅の花」（巻五・未詳）、「百済野の」（巻八・赤人）

〈第九回〉

「巨勢山の」（巻一・人足）、「春霞」（巻一〇・未詳）、「茅花抜く」（巻八・田村家大嬢）、「浅積香山」（巻一六・未詳）、「葛飾の」（巻三・赤人）、「家にあれば」（巻二・有間皇子）、「東の」（巻一・未詳）、「盧原の」（巻三・益人）、「天霧らひ」（巻七・未詳）、「落ちたぎち」（巻九・未詳）

〈第一〇回〉

「信濃路は」（巻一四・未詳）、「信濃なる」（巻一四・未詳）、「稲つけば」（巻一四・未詳）、「大君の」（巻二〇・造人麿）、「たこの浦の」（巻一九・縄麿）、「藤波の」（巻三・四綱）、「思ほえず」（巻六・益人）、「淡路の」（巻三・人麿）、「燈火の」（巻三・人麿）、「名ぐはしき」（巻三・人麿）

各回で取り上げられた歌を通覧すると、どの回も『万葉集』の巻や歌順に従って並べて解釈するという方法はとっていないことが分かる。また、前述した「絵かるた」製作と同時に出版された太田水穂による評釈『萬葉百首選評釈』の歌順の通りでもない。

例えば、第一回の『萬葉百首散歩』に取り上げられた十首（洋数字、作者名、初句の順に記す）について、『萬葉百首選評釈』における歌順（何首目）を記すと、次の通りである。

（1）志貴皇子「石走る」…七三首目
（2）額田王「あかねさす」…五首目
（3）大伴家持「あぶら火の」…五六首目
（4）作者未詳「さつき山」…四四首目
（5）作者未詳「人言は」…六一首目
（6）柿本人麿「ひむがしの」…八七首目
（7）若倭部身麿「わが妻は」…二九首目
（8）作者未詳「にほ鳥の」…二五首目
（9）作者未詳「多摩川に」…一三首目
（10）磐姫皇后「ありつつも」…七首目

評釈の歌順をまったく意識していないことが明らかである。他の回も同様である。また、同じ作者の歌をまとめる意識もあまり見られない。例えば、最も多く選ばれている人麿の歌十四首を見ると、第一回に一首、第三に二首、第五回に四首、第六回に一首、第八回に三首、第十回に三首と、ばらばらに取り上げられていて、部分的に同じ作者の歌を並べる意識はなきにしもあらずだが、全体的な構成においては、歌人ごとにまとめる意識はそれほど強くない。因に、第二回、第四回、第七回、第九回では人麿歌は取り上げていない。

このように見てくると、一〇回の構成は、百首の和歌を材料として田辺聖子が分類し考えたものであることが明らかである。どの歌を、どの回に取り上げ、いかに排列して、どのようなエッセイに仕立てるのかが、工夫されている。次に、

第六回をとりあげて具体的にみておきたい。

第六回は、次の十首から構成されている。[28] 作者名のない歌は作者未詳である。

馬買はば妹徒歩ならむよしゑやし石は踏むとも吾はふたり行かむ　（巻一三）
都なる荒れたる家にひとり寝ば旅にまさりて苦しかるべし（巻三、大伴旅人）
妹が見し楝の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに　（巻五、山上憶良）
幸福のいかなる人か黒髪の白くなるまで妹が声をきく　（巻三）
吾が背子と二人見ませばいくばくかこの降る雪の嬉しからまし
（巻八、光明皇后）
み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜もわがひとり寝む
（巻一、文武天皇）
久かたの天の露霜おきにけり家なる人も待ち恋ひぬらむ
（巻四、大伴坂上郎女）
家に来てわが屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕　（巻二、柿本人麿）
憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれその母も吾を待つらむぞ
（巻三、山上憶良）
銀も金も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも
（巻五、山上憶良）

それぞれの歌から、この回のテーマを考えてみたい。まず、歌に付された評釈を見てゆこう。一首目の「馬買はば」は、普通は馬で行く道を、馬を持たずに歩いて行く夫を悲しむ妻が、母親の形見である「真澄鏡」と「あきつ領巾」を売って馬を買う事を提案するのに答えて詠んだ夫の歌である。この夫のことを「なかなかユーモアのセンスがある。妻が思いつめた表情で夫婦愛を発揚したとき、それを機知と諧謔でもって大らかに返し、妻の申し出よりももっと大きな愛のプレゼントで報いている」と解している。ユーモアというのは山城路を歩くのは夫のみであるからである。もしも、「妻の言葉通りにして馬を買ったら、それは献身の毒気に中てられてしまうことになり、愛ははや、腐臭をたてはじめるであろう」、「夫は妻が鏡と領巾を日常愛着しているのを、ようく知っていた」と推測する。そして、「こういう男のやさしい一言で、女はどんな困難にも堪えることができる。これを男の可愛げという（中略）日本の女たちは千二百年にわたって、男のこういう可愛げを珍重し、賞でてきたのだ」と結んでいる。「男の可愛げ」は、田辺作品、ことに恋愛小説にしばしば見られるフレーズである。この冒頭の一首からも、第六回が夫婦愛をテーマにしていることが分かる。

二、三、四首目と八首目は、妻に先立たれた悲しみを詠じた歌である。夫婦愛のテーマに死別の歌を選ぶことは相応しくないようであるが、例えば、四首目を見ると、その意図が納得出来る。「なんという幸福な人だろう、黒髪が白くなるまで妻の声をきくとは」の意で、妻の死を悼んではいないが、妻を失った悲しみから、「共白髪で夫婦で年老いた幸せな人々を羨む」歌である。「夫婦というものの妙諦は『仲良く長生きする』ことに尽きるような気もしている」と鑑賞している。死別の歌によって、夫婦愛をしみじみと痛感させているのである。

また、五、六首は、独り寝の寂しさを詠んだ歌である。六首目の「我が背の君と二人して見るのであれば、どんなにか、この降る雪が嬉しく思われることでしょうに」と言う歌は、現実には、冷たい雪の降る夜の、寂しい独り寝を嘆いている心情を、反実仮想によって「品のいいあまえぶり」の歌に託している。

死別や独り寝の歌を、「夫婦愛」というテーマに収斂してゆく手法は見事である。七首目には娘の夫婦仲を案じた歌が置かれ、九首目と十首目には、憶良の妻子を思う歌が配されている。夫婦愛のテーマは、娘とその夫、その子供へと展開してゆくのである。

憶良の歌に関しての、「長い人生経験、漢文学の素養、そういうものが底にあり、ある意味では図太い歌である。時に理屈があり、理づめになり、むきつけであるが、そのかわり、歌の常識の枠をとっぱらい、自由自在である」、「恥ずかしいばかり人間の真情を直截にうたい切る」という、全般的な作風に対する鋭い鑑賞も興味深い。

以上みてきたように、『萬葉百首散歩』は、古典に対する造詣による短歌鑑賞が羅列的に記されているのではなく、あたかもエッセイを読む如くに、有名無名の作者の歌を用いて、現代人に通じる人間の真情が描き出されている。田辺聖子の古典エッセイの方法が見て取れるのである。

六、おわりに

『万葉集』は千二百年以上読み継がれてきた我が国最古の歌集である。「令和」という新元号の典拠となったことをきっかけに、近年にわかに注目を浴びている

が、見てきたごとく、昭和初期における『万葉集』享受もまた、現代以上に熱狂的なものであった。古典文学は、時代によって様々な解釈が付与されるものではあるが、『万葉集』ほど、その変動が激しい古典もないであろう。

今回取り上げた田辺聖子の『萬葉百首散歩』にも、『万葉集』に対する読みの変化に触れた箇所が多かった。しかし、田辺聖子は、いかなる時代にも通じる人間の真情を歌った作品としての『万葉集』を、提示しようと努めている。

『萬葉百首散歩』は、歌や歌人に関する知識を披瀝することを目的にしてはいない。また、歌の鑑賞を羅列したものでもない。題目が示すように、あたかも目的地を目指すのではなく、四季折々の景色や道すがらの花を見たり、途中の寄り道もありがちな気の向くままの散歩のような筆致で書かれている。それでいて、各回には歌をまとめるゆるやなテーマがあり、それぞれの回は、自然の景物や、古人の生や心への感動と、人を愛することや生きることへの気づきに満ちている。そこには、田辺文学に通底するテーマが見出せる。

田辺聖子の古典エッセイは、古典の紹介や言葉の解釈に終始する次元で書かれてはいない。和歌を詠じる歌人、有名無名の人々を主人公にしたショートストーリーともいえるものであり、他の田辺文学と地続きの作品世界だと考えられるのである。

田辺聖子が残した数多の古典エッセイは、田辺文学の一環として捉え位置づけるべきであろう。

注

（1）『日本児童文学大系』第六巻（一九七八年、ほるぷ出版）の解説に、「私は昭和十四年頃から『少女の友』をとってもらっていた」とある。
（2）（1）と同書の解説。
（3）本学田辺聖子文学館所蔵。三号まで製作されている。
（4）『少女草』二号（一九四三年一月発行）
（5）『欲しがりません勝つまでは』（二〇〇九年、ポプラ文庫）による。
（6）『少女の友』昭和一八年（一九四三年）三月号。
（7）（5）と同書。
（8）（5）と同書。
（9）『文車日記―私の古典散歩―』（一九七四年一一月、新潮社刊）。
（10）『DAME』（一九八四年七月創刊号、主婦之友社刊）による。
（11）一九八四年一一月七日。
（12）昭和三年（一九二八）一一月、主婦之友社刊。引用は二〇一七年の復刻による。
（13）（10）と同書による。
（14）（10）と同書による。
（15）小川靖彦『万葉集と日本人』（二〇一四年、KADOKAWA）に、当時の万葉享受が詳述されている。
（16）（10）と同書による。
（17）『DAME』一九八四年九月号による。同歌の解説文も全て同書による。
（18）（17）と同書による。
（19）『DAME』一九八五年一月号による。同歌の解説文も全て同書による。
（20）『懐風藻』（『日本古典文字大系』第六九巻、一九六四年、岩波書店）所収。
（21）（10）と同書による。
（22）（10）と同書による。
（23）『DAME』一九八四年八月号による。
（24）『DAME』一九八五年二月号による。
（25）（24）と同書による。
（26）（23）と同書による。
（27）『DAME』一九八四年九月号による。
（28）『DAME』一九八四年一二月号による。

Tanabe Seiko's Approach to Classical Literature in *Man'yo Hyakushu Sampo*

Faculty of Liberal Arts, Department of Japanese Language and Literature
Shuko NAKA

Abstract

Tanabe Seiko is a novelist well known for her romantic stories. She wrote many exquisite, academic essays on Japanese classical literature, and undeservedly they have been hardly discussed. This paper, focusing on *Man'yo Hyakushu Sampo*, reveals that she translates *Man'yoshu* not only into contemporary, vivid Japanese with her accurate knowledge on classics, but also into the contemporary, empathic stories similar to her own novels. Consequently, it can be considered that Tanabe's essays on classical literature are her another fictional world created by method and techniques of her own fiction.

Keywords: Tanabe Seiko, Man'yoshu, Man'yo Hyakusyu sampo, Tanabe Seik' essays